

「ユロージヴィ」と「モロカーニェ」

牧師 山本 護



ロシア文学が描く人物類型には、「ユロージヴィ」というタイプがあるらしい。ユロージヴィとは粗末な風体で各地を遍歴し、神のみを畏敬し、教会や世俗の権威などは何とも思わない「聖なる愚者」のこと。ドフトエフスキーが描く『白痴』のムイシュキン公爵や、『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャなども、このタイプかもしれません。ロシアのキリスト教というと、でっぷり太った赤ら顔の司祭が思い浮かびますが、

痩せた体にぼろをまとって遍歴するイエスのような人物もまた、ロシア・キリスト教の流れにある聖なる系譜の一つなのでしょう。

ユロージヴィの語源は古ロシア語の「ウロード」で、「わたしはキリストのために愚か者(モロス)となっている(1コリント4:10)」の「愚か者」がウロードだそうです。彼の地の国教はロシア正教ですが、古い土着宗教と混じり合うなどして、さまざまな異端教派(正教から見て)が生まれました。とはいえロシア正教はどことなく大らかで、西方教会のカトリックやプロテスタントほどには、異端排斥に神経質ではない感じがします。

私たちが属する西方教会の伝統は、神に関する何事かを言葉尽くして概念化しようとしませんが、ロシア正教が属する東方教会にはそうした概念化を人為だとして拒絶する伝統があります。そのために、自ずと抱え込むことになる「異端的な膨らみ」がロシア芸術の厚みになっているんじゃないか、と私は考えています。穴開くほどにくり返し観たタルコフスキーの映画なども、異端的な膨らみなしには成り立ちません。

訪ねてみたいと思っている異端は、「モロカーニェ(モロカン派)」の集会。モロカーニェの教えは、聖書を唯一真理の源とし、霊的・倫理的に解釈して日常生活の規範にする。イコンや聖遺物を否定し、使徒時代の教会を理想とし、その後に生まれた権威を認めない。聖書の神的権威、キリストの神性、聖霊の力を信じ、キリストの贖罪死、復活と昇天を教理とし、平和主義と清貧を守る。ロシア正教(オルソドクス)にとっては目障りな異端であっても、私たちからすればモロカーニェの方がオルソドクス(正統)じゃないですか。

雪が降り、八ヶ岳伝道所がロシアの森にひっそり建つモロカーニェの礼拝所のように見えて、ひどく懐かしさを覚えました。実際には出会ったことのないユロージヴィやモロカーニェを憧憬する異端的な膨らみ。キリストの多様な創造はロシアの大地のように、教派や教会を易々呑み込むほどたっぷりとした膨らみをもっている、と感じています。Ω